

決戦の日

小久保は六時前には目が覚めていた。着替えを済ませると窓に近づき、空を見つめた。空は雲ひとつない晴天であった。いよいよ今日だ、小久保は青空を見つめながら思った。まさかここに入所して僅かなのに、もうこんなことをするとは自分でも想像していなかったな。事務所占拠、小久保の心は興奮や不安はなく、穏やかさに満たされていた。自分でも不思議だった。

七時に小久保が食堂に着くと、佐々木と織田がすでにテーブルに着いていた。二人の表情は小久保同様落ち着いていた。腹をくくったな、小久保は二人を見て思い、自然と笑みがもれた。すばらしい仲間だ。

「いよいよだな」佐々木が言った。

「ああ」

「四時半に変更はなしか」佐々木が行動を始める時間を確認した。

小久保はうなずいた。その時間は排泄介助に職員が割かれ、また早番職員が退社したあとの時間でもあり、フロアにいる職員数は減っていた。一階の事務所に行くには、エレベーターを使う必要がある。この時間を使えば職員を目を盗んで行動するには都合が良かったのである。

「なあ小久保」佐々木が言った。「計画の内容をもう一度確認したい」

「そうだな」

三人は事務所占拠における段取りの確認を始めた。

決行 1 時間半前

三時のおやつを食べるために、小久保達が食堂のテーブルに着いていると、小久保が外泊から戻ってきた小早川の姿が目に入った。小早川は自分のテーブルのほうへ歩いていると小久保と目が合い立ち止まった。小早川は小久保に向かってゆっくりとうなずいた。

小久保もゆっくりと小早川にうなずき返した。

小早川は視線を戻し、自分のテーブルのほうへ再び歩き始めた。

「失礼します」その時、古賀がお茶とおしぼりを乗せたカートを押しながらテーブルに近づいて来た。「今日はどら焼きです」

「お、勝利の女神さん」織田が言った。

「何ですか、勝利の女神だなんて」お茶とおしぼりを配りながら言った。

「何でもない、こっちの話だよ」織田がおしぼりを受け取りながら言った。

「何か分からないけど、女神のような私に会えたから、きっとこれから三人にとっていいことがあるかもですよ」

三人は顔を見合わせると、笑い出した。

古賀もつられて笑顔を浮かべ、小久保におしぼりを差し出した。

「ありがとう」小久保は笑顔で言った。その時、古賀の後ろ、廊下で男性利用者が手すりに掴まって歩こうとしているのが目に入った。「古賀さん、後ろ」小久保は男性利用者を指しながら言った。「彼はいつもシルバーカーを使ってないか」

古賀は急いで振り返り、廊下を確認した。「あっ、まただ。失礼します」古賀は三人に挨拶をすると、急いで彼のもとへ向かった。

「加藤さん」古賀が言った。「ほらあ、また大事な高級ベンツを忘れていますよ。そこで待っていて下さいね」

「あ、そうだ、そうだ」加藤は思い出した。

古賀はトイレの出入り口のそばに置いてあったシルバーカーを加藤がいる場所まで移動した。「はい、高級ベンツ」

「悪い悪い、ありがとう」そう言うと、加藤はシルバーカーを掴み、廊下を進み始めた。

小久保の視線が加藤から食堂に移った。食堂はいつもの風景だった。利用者の皆にとっては何も変わらない今までどおりの一日を過ごしていた。小久保は利用者達を見ながら思った。この食堂には数十人の利用者が集まっている。テーブルに着けば、前や横に他の利用者の顔がすぐそばに見える。物理的には独りじゃないが、ほとんどの利用者は他の利用者に言葉を交わすことはない。その理由は一様ではないが、結果的には前向きな意欲を失い、いや、諦めたことによる孤独感が漂う食堂になっているのだろう。

小久保はつぶやいた。「諦めた明日を希望が持てる明日に変えるために」

決行

時刻が四時を過ぎると男達三人は小久保の部屋に集まっていた。

「差し入れをもらってくる」小久保が言った。

「差し入れ？」織田が言った。「差し入れってなんなんだ。まさか千人針か」

「それも悪くないな」小久保は織田の返しに思わず笑みを浮かべた。

「そうさ、今の俺達は神風特攻隊だ！」

まんざら間違えではない。小久保は思った。事を起こせば俺達三人の結末は目に見えている。小久保は小早川の部屋に向かった。

小早川の部屋の前に着くと、ドアをノックした。ドアが開くと、小早川が短剣を持って立っていた。

「そろそろ来ると思っていました。さあどうぞ」小早川が短剣を小久保に差し出した。

差し入れか、小久保は短剣を見ながら安田講堂事件の弁当運びを思い出した。まさかこの歳でもらう側になるとは。あの頃の希望がやっと叶ったわけだ。小久保は短剣を受け取った。

「夫の形見です。必ず夫が守ってくれることでしょう」小早川が言った。

「立派な短剣ですね。大事に扱います」短剣は思った以上に重かった。

「誰も傷つけないでね」

「もちろん」そう言うと、短剣を車イスと身体の間に入れて見られないようにした。

「それでは」そう言うと、仲間のもとへ向かった。

小久保が二人と合流すると、三人はエレベーターに向かった。エレベーターの前に来ると、小久保がエレベーターの乗降用ボタンを押すための暗証番号用テンキーに近づいた。エレベーターは利用者の離脱防止のため、使用する際には暗証番号を入力しなければならなかった。当然利用者は暗証番号を把握していない。

「おい」佐々木が言った。「今更だが、エレベーターを呼び出す暗証番号は大丈夫なんだろうな」

「大丈夫だ」小久保は職員が押している暗証番号を何度も見て、暗記していた。小久保は暗証番号を打ち始めた。打ち終わるとテンキーの下にある乗降用ボタンの下りを押した。下りボタンが点灯した。するとエレベーターが静かに動き始めた。

「しかし、なんだな」織田が言った。「まさか俺がエレベーターも自由に使えない場所で生きることになるとは、情けなくなっちまう」

「だから」佐々木が言った。「自由に使えるために闘うのさ」

やがてエレベーターが二階に着くとドアが静かに開き始めた。小久保の予想どおり、フロア付近にいる職員数が少なくなったこの時間、三人がエレベーターに乗り込む姿に気づ

く職員はいなかった。エレベーターに乗り込むと、三人はエレベーターの正面で立っている小早川の姿が目に入った。

小早川は三人を見ていた。エレベーターのドアが閉まり始めた時、小早川が三人に向かって敬礼をした。三人も小早川に敬礼を返した。

三人は一階に着くと、事務所へ進んだ。途中、誰にも呼び止められることもなく、難なく事務所まで行き着くことができた。

小久保が短剣を取り出すと、佐々木と織田は目を見開いた。

「差し入れってこれか」佐々木は彼女からの差し入れをきつとなにかのお守りだろうと思っていたため、短剣を見た時、正直驚かせられたのであった。「立派な短剣だ」

「へえ、すげえな」織田が言った。「あのばあさんの夫はヤクザだったのか」

「ヤクザじゃない、軍人だ」小久保はそう言うと、短剣の先を佐々木に向けた。「鞘^{さや}を握ってくれ」

佐々木は鞘を強く握った。

小久保は短剣を鞘から抜きだした。鞘から出てきた刃身^{とうしん}は曇りひとつないシルバーの光沢を放ち、充分手入れがされていた。

「とても大事にしているんだな」佐々木は短剣から目を離さずに言った。

「ああ、小早川さんにとって大事な形見だ」

佐々木の表情が曇った。「おい、まさかこれで人を傷つける真似はしないだろうな」

「当然だ」そう言ったあと、小久保は二人に言った。「事務所に入ったら、もう後戻りはできない。降りたければ自分の部屋に戻ってもいいぞ」

「馬鹿言うな」佐々木吐き出すように言った。「この短剣に恥をかかせるようなことはできない」佐々木が言った。

「さっさと始めようぜ」織田が言った。俺が忘れないうちに……。織田は声に出さずに言った。織田は認知症状が進んでいることを自覚していた。つまらない施設の生活なんて忘れてもいい。しかし今日、これから始める事は忘れたくはなかった。誰の指図も受けず、自分の意志で動き発言できたことを。結果がどうあれ、思い切りやり遂げた自分を忘れたくはなかった。

小久保は事務所のドアを見た。「よし、始めよう」

男達は事務所のドアに向かって足を踏み出した。

入口近くのデスクに座っていた医事課の松下は入口に気配を感じ、顔を向けた。松下が

最初に見たのは車イスで事務所に入ってきた小久保の姿だった。次に目にしたのは車イスの佐々木、杖をついている織田だった。松下は違和感を抱いた。職員の付き添いはなく、利用者だけ、それも三人。なぜここにいるの？

松下は立ち上がり、三人に近づこうとしたが、彼女の足が止まった。彼女の視線の先には、小久保が握っている短剣があった。「ちょっと、何」小声で発するのが精一杯だった。

事務所にいる他の職員も小久保達の姿と彼が持っている短剣を目にした。そしてただならぬ状況になり始めたことを感じた。

事務所には松下の他に、主任相談員の長谷川、総務課の秋野、そして澤田がいた。長谷川と秋野はその場で立ち上がり、男達を見つめ、この状況を理解しようとしたが、答えが見つからなかった。そして事務所の奥にいる澤田は短剣を目にすると、本能的に体をかがめ、パソコンのモニターで身を隠した。そしてゆっくりとモニターの脇から男達を覗き始めた。

小久保達は入り口から奥へと進み始めた。一番近くにいる松下は男達との距離を保つため、ゆっくりと後ずさりした。他の職員も彼等の動きを注視している。

「今からここを占拠する」小久保は怒鳴ることなく、冷静な口調で言った。「君達はここから出て行ってもらおう」

織田がこちらを覗いている澤田を見つけた。「おやおや！」

織田と目が合った澤田は顔を引っこめた。

「そこにいるのは、澤田君じゃないか」織田はそう言うと事務所を見渡し、小さなキッチンを見つけるとキッチンに近づき始めた。「澤田よお、ここを占拠したらもうお前とは会えないと諦めていたんだ」織田はキッチンに着くと、引き出しを開けて、中に手を入れ何かを探し始めた。「お、あったあった」織田は引き出しから手を出すと、その手には刃渡り十センチほどの果物ナイフが握られていた。

織田は右手で果物ナイフと杖を器用に握ると、杖を突きながらゆっくりと澤田に近づいて行った。「お前と会えたのは、きっとあいつが、ほら、えーと。くそっ、名前が出てこない」織田は歩くのをやめ、佐々木に顔を向けた。「おい、死んだあいつの名前って」

「藤田だ」佐々木は言った。

「そうそう」そう言うと、織田は澤田に向かって歩き始めた。「きっと藤田が引き合わせてくれたんだ」織田は澤田のデスクの前まで近づくと、杖をデスクに立て掛けた。

澤田は伏せていた顔をゆっくりと上げた。目の前に織田の顔が見え始め、目と目が合っ

た。織田の目は憎しみに満ちていた。

織田は刃先を澤田に向けながら言った。「俺には藤田の声が聞こえる。藤田が柳の下から俺の仇を討ってくれって言っているのがな」

「おい、何をする気だ！」小久保が怒鳴った。

「仇を討つ」織田は抑揚のない口調で言った。その口調が感情のない冷酷な男のイメージを感じさせた。

澤田はいっきに震え上がった。

「澤田」織田が静かな口調で言った後、表情を鬼の形相のように変えるとナイフを持った右腕を大きく振りかざし藤田に向かって怒鳴った。「往生せいや！」

澤田は、その怒鳴り声がまるで合図だったかのように、椅子から飛び出すと一目散に事務所のドアのほうへ走り出し、事務所から逃げ出して行った。

「見ろよ、あいつ慌てて一人で逃げて行きやがった」織田は呆れた顔で言うと、顔を職員に向けた。「お前たち、見捨てられたぞ！ 最低な上司だな」

小久保は織田をにらみつけた。「もう馬鹿なことはするなよ」

織田の表情は小久保とは対照的で穏やかだった。「俺が本当にあいつを刺すと思っていたのか。脅しただけだよ。あいつは刺す価値もない男だ」そう言うと果物ナイフを澤田のデスクの上に投げた。

「ここで一体何をするつもりですか」秋野が小久保に言った。

「君達はここから出ていってもらおう」

「小久保さん」長谷川が言った。「あの事務長のことだから、きっと警察に通報しますよ。そうなればここだけで済ますことはできません。今ならまだ間に合います」

「出て行きなさい」

「事務長には私から言います。これ以上――」

「なあ」佐々木が遮った。「君の名前は」

「長谷川です」

佐々木はうなずいたあとに言った。「長谷川さん、俺達は大ごとになることを待っているんだ」

「どういうこと」長谷川は眉をひそめながら呟いた。

その時、上井が事務所に入ってきた。「事務長はいるかしら」

上井はすぐに足を止めた。小久保や佐々木など普段いるはずもない利用者がここにいる

ことと職員の表情から、ただ事ではない何かを感じ取った。

「何、どうしたの」上井は誰と無く言った。

小久保が剣先を上井に指しながら言った。「すぐここから出て行きなさい」

上井は短剣をしばらく凝視した後に視線を小久保に向けた。「あなた、何をしているの。それにその刃物はどうしたの」

「もう一度言う、ここから出ろ」

上井は佐々木、織田を見た。乗っ取り。上井は直感した。「わかったわ」そう言うと上井は秋野の顔を見た。「安心して、何とかするから」上井は事務所から出て行った。

「小久保さん」秋野が言った。「もしかして敢えてここに警察が来るのを待っているのですか。いや、マスコミ？ マスコミは高齢者施設で利用者が施設を占拠したなんて聞けば必ず興味を引く」

小久保は何も言わず秋野を見つめていた。

「目的は」秋野はそう言うと言すのをやめ、考え込むと、じきに何度かうなずいた。「そういうこと。あなた達の狙いはマスコミに訴えることですね」

「警察が来る前にここを出なさい」小久保は長谷川や松下を見た。「君達もだ」

「他に方法があるはずですよ」秋野は施設内 P H S を手に取り、かけ始めた。

「おい」小久保が言った。「警察にかけているのか。別に構わないが」

「違います。介護長です」そう言うと、秋野の耳に介護長の声が聞こえてきた。

「山口か……うん、彼をここに呼べ」

「介護長、秋野です」秋野は小久保を見ながら山口に今の状況を伝え始めた。

「おい」織田が小久保に言った。「大丈夫なのか。そいつからギャアギャア言われたくない。面倒くさくなるのはご免だ」

「多分大丈夫だ。それに、あいつがどう思うのか直接聞いてみたい」

「刃物を持って事務所にいるんだな」山口は思いもよらない知らせを受け、混乱していた。「もう一度聞くが、小久保さんが刃物を持って事務所にいるんだな」山口は自分の頭を整理するため確認した。

「そうです」

「事務所を占拠した目的はなんだ」

「直接聞いてみてください」

山口は目を閉じて顔を伏せた。

山口のそばにいた鈴木は事務所占拠を聞き、口が半開きになるほど驚いていた。

「分った、すぐに向かう」山口は電話を切ると、急ぎ足で事務所へと向かい始めた。

「あ、介護長」鈴木が山口の後ろ姿に声を掛けたが、山口はそのまま走り続けた。鈴木は山口を追い始めた。

山口の後ろ姿を見ていたのは鈴木だけではなかった。もう一人、廊下に置いてあるソファに座っていた小早川も彼を目で追っていた。

小早川は山口の姿が見えなくなるとゆっくり腰をあげた。「さてと」小早川は辺りを見渡した。ちょうど早番勤務が終わり、退社しようとしていた古賀が近づいてきていた。

「ちょっと」小早川は古賀を呼び止めた。

古賀は足を止めた。「何でしょうか」

「お願いがあるんだけど、私を事務所まで連れて行ってほしいの」

「事務所に何か用があるのですか」

「そう、介護長の手綱を握っておかないと、間違った方向へ走り出してしまうわ。それに見ているだけじゃつまらなくなってきたの。私も仲間になろうかなって、決めたの」

古賀は小早川の言っていることが理解できずにいた。「介護長？ 手綱？ ですか」

「そう、下では面白いことが始まったのよ」

「面白いこと？」

小早川は笑顔でゆっくりとうなずいた。

古賀は小早川の言っていることが理解できなかったが、すでに退社の時間でもあり、フロアから離れることはできる。そして小早川の面白いことに興味を持ち始めていた。「分かりました。行きましょう」古賀はフロアの職員に小早川さんを事務所まで連れて行くことを伝え、小早川をエレベーターの前まで連れて来た。

エレベーターのドアが開くと二人は中に入った。

エレベーターのドアが閉まるなか、古賀が尋ねた。「何が起きているのですか」

小早川は何も言わず穏やかな表情で前を見つめていた。エレベーターのドアが静かに閉まり始めた。